2026 年度　高等学校入学試験問題

2月10日
国　語

【注　意】

1．試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

2．問題は一から三までです。確認後、問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。

3．試験中は試験監督の指示に従うこと。

4．問題冊子の余白は自由に書き込んで構わない。ただし、答えは解答用紙に記入すること。

5．「、」「。」は一字とする。

受験番号		氏　名	

一　漢字に関する次の問に答えなさい。

問一　次の1～5の――線の漢字の読みがなを答えなさい。

1　匿名の手紙が届く。
2　靴下を繕う。
3　不正に憎悪の思いを抱く。
4　全体を掌握する。
5　栄養を十分に摂取する。

問二　次の1～5の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

1　グウゼン町で友達に会う。
2　テンメツする光を見つめる。
3　修学旅行でコフンを訪れる。
4　ゲンソウ的な風景に感動する。
5　悪だくみをソシする。

二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

一〇代で進路を定めるのは難しいし、その段階ではいろいろなことが分からなくて当たり前だと思います。だから悩みますね。［　A　］、悩んでいても、生活の中では悩みなどお構いなしに①短期的な課題が次々に到来します。定期テストの勉強をしなければならないし、受験に備えた勉強もしないといけない。部活動などでも次々にやることがでてくる。

〈　ア　〉

将来のことに悩むと、そういった短期的な課題に身が入らないことがあると思います。僕がよく学生に言っているのは、とりあえずまずは目の前にある短期的な課題に一生懸命に取り組みなさいということです。将来のことは不安です。不安ですけれども、だからといって定期試験の勉強をしないのはよくない。明日の学校の授業に真面目に取り組まないのもよくない。

〈　イ　〉

「世の中をよくしたい」とか、「何でもいいから大発見をしたい」とか、「人間とは何かを考えたい」とか、具体的には何を指しているのかがよく分からないことでもいいから、自分の中にあるボンヤリとした関心事、すごく遠くにあることを大切にする。

〈　ウ　〉

つまり、ものすごく近くにある課題とものすごく遠くにある関心事の両方を大事にする。なぜこんな話をするのかというと、その間にある中間的な領域のことはなかなか思い通りにならないんですね。どんな大学に行きたいとか、どんな会社に行きたいとか、そういったことはなかなか思い通りにはなりません。ですからそこに目標を置いてしまうととても苦しいことになる。でも、来週の定期試験の勉強はできますよね。また、「何でもいいんだけど、何か世の中をよくすることをしたいな」とかボンヤリ考えることもできます。

〈　エ　〉

短期的な課題を一つ一つこなしていくと、課題で求められていたこと以上の何かが身につきます。人の話の聞き方だったり、自分の特性についての理解だったり、休みの取り方だったり、友だちとの情報共有の仕方だったり、失敗の受け止め方だったり、仕事の順番の決め方だったり、短期的な課題はたくさんのことを教えてくれる。その上で、遠くにある自分にとっての大切なことをボンヤリとでも思い描いていたら、人生におけるブレを不必要に大きくしないで済むように思います。先ほど言った、中間的な領域での思い通りにならないことによって必要以上に振り回されずに済む。

〈　オ　〉

僕自身もそうだったように思うんです。僕にとっての、ものすごく遠くにある大切なものというのは、「ものごとを本質的に考えたい」みたいなことだったと思います。こんなにボンヤリしているわけですから、それがどういう形で具体化できるのかはよく分からなかった。結局、哲学という分野に落ち着いたわけですけれども、「哲学をやる」なんていう明確なイメージは若い頃にあったわけじゃない。哲学という領域は広

大ですけれども、僕にとってはそれですら中間的な領域だったんですね。様々な事情で②それが決まっていった。で、それが決まっていくまでの間、一応、目の前の短期的な課題の一つ一つには一生懸命取り組んでいた。その結果として哲学の研究者になったという次第です。

では僕が研究している哲学なる領域を勉強することにはどんな意味があるのか。これについてはいろいろなことを言えるのですが、一つ、最近よく思う点をあげてみたいと思います。③哲学というものを勉強すると、世の中に溢(あふ)れている紋切り型の考え方から距離を取れる――僕はそんな風に考えています。

世の中には或る問題、論点についての［　X　］化された答えが溢れかえっています。それらはだいたいが、賛成ならこう、反対ならこうという形を取っています。賛成と反対で［　X　］が決まっているわけですから、もうそれ以上話が進みません。どちらかがどちらかを何らかの仕方で圧倒して否定するしかその問題への解決はなくなる。今だと「テンプレ」なんて言葉もありますが、ある事柄について意見を形成しようとすると、まず賛成か反対かを決めなければいけなくて、そして賛成にも反対にもテンプレが用意されているから、そのテンプレのどちらかに身を置くことになってしまう。

でもそこで問題になっていることについてよく調べて考えてみると、テンプレが見落としている論点が見えてくることがあります。そしてその論点に注目することによって、テンプレ上の対立が無効化されることがよくあります。あるいは、テンプレに留まっていたならば考えることのできなかった問題が見えてくる。

そういう風にしてテンプレに留まることなく考えを進めていけるようになることこそ、哲学を勉強することの意味の一つだと僕は思っているんです。［　B　］、哲学というのは基本的に問いを立てて、その問いに概念をもって答える営みだからです。

あらかじめ用意された問い――この事柄について賛成か反対か――をただ受け取り、あらかじめ用意されたテンプレに身を置かざるを得ないのは、自分なりにその事柄について問いを立てるという営みが省かれているからです。哲学の勉強をすれば、問いを立てて、概念をもってそれに取り組む訓練ができますし、哲学の勉強にはそのような訓練が含まれていなければなりません。そもそも歴史上の哲学者たちは、誰でも、何らかの問いを立て、それに自らの概念をもって取り組んだ人たちなのです。

［　C　］「カントという哲学者がこういうことを言った」という知識を蓄えることは大切です。それはかつて存在し、またそれに対する取り組みが行われた問いを、一つの重要な例として知ることだからです。けれども、そこから更に進んで、いま自分を、あるいは自分たちを悩ませている事柄について問いを立てるということもできるようにならなければならない。そもそもそれに悩まされているのなら、それをどうにかしないといけないわけですから。そのための訓練を哲学は提供してくれるし、提供しなければなりません。僕はそのような訓練――しばしば修行と呼んでいるのですが――これこそ哲学を勉強する上で非常に大切なことだと思っています。知識をインプットするのはもちろん欠かせない。けれども、それだけでなく、そうした訓練や修行を、哲学の勉強を通

じて行って欲しいと思っているのです。もちろん、僕ら哲学教育に携わる人間たちも、そのことを④肝に銘じておく必要があると思っています。

少し大学院生向けのお話もしておくと、近くにある課題と遠くにある関心事は研究においても大切だと思います。研究というのは意外と同調圧力が強いんです。「みんながやっているから」とか「いまはこういうやり方をしないとウケないから」とか、そういう圧力がどうしてもかかる。その中で、そもそも自分がやるべきだと思っていたことから逸れていってしまうことがある。だから先ほども述べた、すごく遠くにある関心事というのは、研究においても大切だと思います。それを大切にできていれば、研究においても必要以上にブレないですむ。

大学院生だったら、すぐ近くにある課題というのは、文献を読むとか、投稿論文を締切りまでに書くとか、そういうことです。それには全力で取り組まないといけない。でも、その中で、ものすごく遠くにある自分にとって大切なことを忘れてしまったら、どうしても同調圧力に負けていくことになってしまいます。もちろん、軽く今のトレンドに合わせたフリをするというやり方もありうるし、それはたまには必要だと思いますが、自分を見失わないためには、ものすごく遠くにあって、ボンヤリしている関心事を大切にすることが必要です。

ものすごく遠くにあるボンヤリした関心事とものすごく近くにある課題を大切にする。その間のことはなかなか思うようにはならないと分かっておく。かなり人生論的な話ですけれども、これが今日、僕が若い人たちにお伝えしたいことの一つです。

（國分功一郎『目的への抵抗』）

問一　本文中の［　A　］～［　C　］に当てはまる語を、次の**ア**～**オ**よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　なぜならば　　**イ**　つまり　　**ウ**　たとえば
エ　でも　　**オ**　そして

問二　――線①「短期的な課題」として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　将来の自分を漠然と予測する。
イ　何学部に進むべきかを考える。
ウ　歴史的大発見をしたいと考える。
エ　人生をどう生きるかを模索する。
オ　円滑な友人関係について考える。

問三　次の文章が入る最も適当な箇所を、本文中の〈**ア**〉～〈**オ**〉より選び、記号で答えなさい。

> その上で、自分の人生においてものすごく遠くにあること、将来についてのものすごく漠然としたことを、何となくでいいので考えておいたらいい。曖昧でよいのです。

問四　――線②「それ」は何を指していますか。「～こと。」に続くように本文中から**五字**で抜き出しなさい。

問五　――線③「哲学というものを勉強すると、世の中に溢れている紋切り型の考え方から距離を取れる」とはどういうことですか。傍線部の形式段落以降の段落の内容を踏まえて、「哲学を勉強することは～」の後に続くように、**六十字以内**で説明しなさい。

問六　本文中の［　X　］には、同じ語句が入ります。最も適当なものを、次の**ア～オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　パターン　　**イ**　トレンド　　**ウ**　対立

エ　無効　　**オ**　問題

問七　――線④「肝に銘じて」の意味として、最も適当なものを、次の**ア～オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　大切なことを書き留めて忘れないようにして

イ　重要だと思うことを相手に伝えるようにして

ウ　大切なことを常に心に思い浮かべて

エ　重要なことを心の奥深くに刻み込んで

オ　大切だと感じた時は名前をつけて

問八　本文の内容として正しいものを、次の**ア～オ**より一つ選び、記号で答えなさい。

ア　将来のことは不安だが、目の前のことを一つ一つ取り組むことで中間的な領域のことができるようになる。

イ　短期的な課題をこなしていくと、ボンヤリと考えなくても自分の将来の目標が必ず実現できるようになる。

ウ　テンプレは人間が生きていく上で必要だが、それに頼り過ぎずに自分なりに問題点を見つけるべきである。

エ　哲学を勉強していくことで、社会を悩ませている様々な問題に対しての対応力を身につけることができる。

オ　研究をしていると同調圧力で自分がやるべきことがブレるので、目の前にある問題をこなすことが必要である。

三　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

著作権への配慮から
現時点での掲載を差し控えております。

著作権への配慮から
現時点での掲載を差し控えております。

著作権への配慮から
現時点での掲載を差し控えております。

（原田マハ『スイート・ホーム』）

著作権への配慮から
現時点での掲載を差し控えております。

問一　――線①「私も、同時に頭を下げた」ときの「私」の思いとして最も適当なものを、次の**ア**～**オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　肉親への信頼　　**イ**　自分への発奮
ウ　「真君」への同調　　**エ**　「父」への警戒
オ　「姉」への共感

問二　――線②「不意をつかれた」とありますが、「真君」がそうなった理由として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　「私」との結婚が決まった直後に、式の日取りについて尋ねられるとは思わなかったから。
イ　「おばちゃん」が、このタイミングで式の日取りの質問をした意図がわからなかったから。
ウ　「おばちゃん」のつぶやくように尋ねた声が、誰に向けたものかわからなかったから。
エ　結婚式の日取りについて話そうとしていたが、考えがまとまらないうちに質問されたから。
オ　結婚式の日程が急であったため、回答するのに後ろめたい気持ちがあったから。

問三　次の一文が入る最も適当な箇所を、本文中の〈**ア**〉～〈**オ**〉より選び、記号で答えなさい。

それが、おばちゃんの決意だった。

問四　X　に当てはまる最も適当なものを、次の**ア**～**オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　生活　　**イ**　明日　　**ウ**　健康
エ　自立　　**オ**　練習

問五　――線③「『鶴の恩返し』みたいなもんや」とありますが、この時の「いっこおばちゃん」の思いを**九十字以内**で答えなさい。

問六　――線④「ふと、立ち止まっては天井を仰ぐ」とありますが、この時の「いっこおばちゃん」の様子や心情を表したものとして最も適当なものを、次の**ア**～**オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　あせりと希望　　**イ**　落胆と信念
ウ　執念と感謝　　**エ**　あきらめと反骨
オ　葛藤と自負

問七　「真君」が「私」に結婚を申し込んでから、式を予定通り行うまで、およそ何か月ですか。最も近いものを、次の**ア**～**オ**より選び、記号で答えなさい。

ア　二か月　　**イ**　四か月　　**ウ**　六か月
エ　八か月　　**オ**　十か月

問八　本文の今後の展開として考えられるものを、次の**ア**～**オ**より一つ選び、記号で答えなさい。

ア　リハビリを支援する「私」たち家族は、「いっこおばちゃん」と二人三脚で歩行練習に付き添い、結婚式に参加できるまでに至った。

イ　リハビリを経て歩行に自信が持てるようになった「いっこおばちゃん」は、今度は走る練習をし始めて、「私」たち家族を驚かせた。

ウ　「いっこおばちゃん」は、当初のプログラム以上の早さで歩けるようになり、式典では「私」と一緒にヴァージンロードを歩いた。

エ　「いっこおばちゃん」は、杖を突いて歩けるところまで回復したが、自分の足では歩けなかったため、家族と約束した通り結婚式に参列しなかった。

オ　驚異的な回復力を見せた「いっこおばちゃん」は、リハビリに励んだこともあり、自分の妹の娘である「私」の結婚式に無事参列することができた。

問九　本文の表現・構成の説明として正しいものを、次の**ア**～**オ**より一つ選び、記号で答えなさい。

ア　倒置法や体言止めは、客観的な視点から具体的な情景を結び付けながら、「私」の心情を強調している。

イ　直喩を多く用いることで、読者にとって登場人物の心情や話の全体像をつかみやすくしている。

ウ　「――」は、ある種の間を取りながら、その前後で「私」の様子を細かく表現している。

エ　「リハビリ」「トレーニングセンター」とカタカナで表記することで、歩行訓練の厳しい印象を和らげる効果がある。

オ　「微笑んだ」は、登場人物が幸せや愛を感じる事柄に用いられ、物語の世界観を明るくする効果がある。